

頻度を表す接尾語に関する一考察 —「ぎみ(気味)」を中心に—

台湾・淡江大学日本語文学科 江雯薰

1. はじめに

現代日本語において、「ぎみ」「がち」「ばい」「やすい」などは、傾向を表し、類義語として取り扱われている接尾語である。傾向とは、性質や状態などがある方向にむかうことを表し、次のような二つの場合がある。

- (1) 「——分ったよ、畜生！」小倉はやけ気味に言った。(血)
- (2) 若い頃から病気がちで、入退院を繰り返してきた。(http://te.wvy.jp/pg/byouki19.html)

(1)は「物事が自分の思い通りに運ばなくて、どうにでもなれという気持ちになる」ことを表すが、(2)は「何回も病気になった」ことを表す。(1)では一時的な状態(以下で「状態の傾向」と称す)を表し、(2)では何回も起こること(以下で「頻度の傾向」と称す)を表す。このことから、傾向を表す接尾語は、状態・頻度と関わりがあると考えられる。

本発表では、傾向を表す接尾語の一つ、「ぎみ」を対象に考察し、「ぎみ」以外の語は今後の課題とする。

「ぎみ」について、『日本国語大辞典(第二版)』(2002)では、接尾語として取り扱われており、「名詞や、動詞の連用形に付いて名詞、形容動詞をつくり、そのような様子、傾向にあることを表わす。…の様子。」と説明されている。

構文的に見ると、(3)～(5)のような用法がある。

- (3) 海側のガードレールの影が、荒れぎみの路面のうえを、内側の車線までのびてきている。(寝顔)
- (4) 18歳、若干オタク気味な男子高校生です。(http://qa-now.com/d/247988)
- (5) 「きみは山が好きなんだろう」外山三郎はややあせりぎみにいった。(孤高)

名詞が後接する場合、(3)のように「の」が介在して名詞的に、また(4)のように「な」が介在して形容動詞的に用いられる用法がある。(5)のように「に」が後接して、「ぎみに」の形で副詞的に用いられる用法もある。

意味的に見ると、前述の(5)のように、「状態の傾向」を表す場合もあるが、次の(6)のように「状態の傾向」も「頻度の傾向」も考えられる場合がある。

- (6) 多湿と酸性を嫌うので、用土は石灰を施し、日当たりと水はけの良い場所でぎみに管理します。(http://item.rakuten.co.jp/purefarm/313149/)

このようにみると、「ぎみ」によって表される傾向には「頻度」との関わりがあると言える。なお、本発表では、「ぎみ」の副詞的な用法、つまり「ぎみに」を中心に考察する。

2. 先行研究

「ぎみに」に論及するものは管見の限りないが、「ぎみ」について論及するものがある。それは、森田(1989)、井上(1998)、八尾(2006)などである。

森田(1989)は、「がち」との比較で「ぎみ」を取り上げている。「ぎみ」について「「風邪ぎみ」「ふとりぎみ」「一ぎみ」も“そのような傾向にある”の意を添える接尾語である。」とし、また「現在そのような傾向・状態が幾分か現れているのである。そのような徴候が外在していると話し手は判断している。あくまで話し手の主観としてその徴候ありと判断し、好ましくないマイナス状態の傾向ととらえている。」と述べている。

井上(1998)は、「がちだ」「ぎみだ」「やすい」を取り上げ、傾向を表す表現を考察したものである。氏は、「「がちだ」は<頻度傾向>を表し、「ぎみだ」は<状態傾向>を表すことになる」としている。

八尾(2006)は、「がち」「ぎみ」「やすい」を接辞として取り上げ、「事例の多さ」と「状態の傾き」に分けて考察したものである。「ぎみ」について、「前接要素の性質のいかんに関わらず、事例の多さを表すことはなくもっぱら状態の傾きを表す」と

し、また「状態の小さな傾きを表すだけでなく、語気を和らげる機能を持っている」ともしている。

以上から、「ぎみ」は状態の傾向を表し、しかも話し手の主観的な態度が含まれている接尾語であると考えられる。一方で、「ぎみ」の「頻度の傾向」性について言及しているものはない。このことは、前述の(6)のような例(「多湿と酸性を嫌うので、用土は石灰を施し、日当たりと水はけの良い場所で湯きぎみに管理します。」)について説明が不十分になるところがあると考えられる。それは、(6)の「管理する」が、用土の状態を良好に保つために適当な操作・調整をすることを表し、「頻度の傾向」とも読み取れるからである。

そこで、本発表では前接する語、文末のアスペクト、話し手の評価、事態の捉え方といった観点で「ぎみに」を考察する。

3. 前接する語について

「ぎみに」に前接する語については、先行研究で示されているように名詞と動詞であるが、副詞が前接する場合もある。

まず、名詞が前接できる場合は、「自嘲」「困惑」のような「運動性」¹をもった名詞が多い。

(7) たけるに、一体どうしてそれがわかったのかわからない。でも彼にはその瞬間にわかったのだ。それで、「わかってる」と、やや自嘲ぎみに言った。(号泣)

(8) 彼は声をくぐもらせ、困惑気味に、「残念だがそれは無理だな」と答えた。(スメル)

(7)の「自嘲」は「自分で自分をつまらぬものとして軽蔑する」ことを表し、(8)の「困惑」は「どうしてよいか判断がつかず迷う」ことを表す。いずれも動詞的意味、つまり「運動性」がある。

次に動詞が前接する場合をみると、「ぎみに」は動作・変化を表す動詞とは共起できるが、「馬鹿げる」「ある」「いる」のような動作・変化を表さない動詞とは共起できないことが以下の(9)～(13)から明らかになる。

(9) 両脚を開きぎみにカーペットのうえにしっかりと踏んぱり、腰と背をのばし、まっすぐに彼女は立っていた。(景色)

(10) クテナンテの栽培方法 | 用土は乾かし気味に育てます。(http://flower777.info/cat61/cat289/post-255.html)

(9)の「開く」は動作を、(10)の「乾かす」は変化を表す動詞であり、工藤(1995)で言えば、いわゆる動作・変化を持つ「外的運動動詞」である。このような「運動性」を持つ動詞は「ぎみに」と共起すると、「状態の傾向」を表す。それに対して、

(11) *馬鹿げぎみに～。

(12) *ありぎみに～。

(13) *居ぎみに～。

「馬鹿げる」は特性を表す動詞であり、恒常的な状態を表す。「ある」「いる」は存在を表し、「状態性」は持つが、「限界性」²は持たない動詞であり、工藤(1995)で言えば、いわゆる動作・変化を持たない「静態動詞」である。これらは「ぎみに」と共起できないことから、「運動性」「限界性」を持つことが重要であると言える。

次は、副詞が前接できる場合である。

(14) 昨日は大会に出場したので、今日はゆっくり気味に10キロ走りました。(http://www.jognote.com/days/10817416)

(14)の「ゆっくり」は「動作が遅い様」を表し、「運動性」を持つ語である。「ぎみに」が後接して、そのもの全体の状態を表すのである。現代小説に実例はないが、ネットで調べると、ないとまでは言えない。前接できる副詞の多くは情態副詞である。

このようにみると、「運動性」や「限界性」は「ぎみに」に前接する語にとっては欠かせない要素であると言える。

次に先行研究で言及されていない「頻度の傾向」について見ていく。

以上からは、「ぎみに」は「状態の傾向」を表すと言えるが、次の(15)(16)のように「頻度の傾向」も表すことができる。

(15) …(中略)…、その車は左折後タイヤを鳴らしぎみにいく。(http://kagidr9955.blog68.fc2.com/blog-entry-416.html)

(16) 依然流動的であることから戦闘の最前線を見極めることは難しいものの、軍事面では全体として体制側が押し気味に

¹ 「運動性」とは出来事や事態が動作や変化を表していることをいう。

² 「限界性」とはtelicとも呼ばれ、事態や出来事に限界点が存在することをいう。

推移しており、反体制側の勢い（モメタム）は失われつつある。

(http://www.energyjl.com/2011_folder/March/11new0318_3.html)

(15)の「左折後」、(16)の「全体として」と「推移する」によって、それぞれ事態が繰り返して起き得る時間の幅が提示されている。これらは、同様のことが何度か繰り返されることで、ある傾向が認められる場合である。つまり、「頻度の傾向」を表す。

以上から、「ぎみに」は基本的には「状態の傾向」を表すが、動詞の語彙的意味、補語、複数の主体などによって、「頻度の傾向」が読み取れると言える。また、前接する語は「運動性」や「限界性」を持つことが重要であるということも言える。

4. 文末のアスペクトについて

文末の述語の語形をみると、(17)～(19)のように「状態の傾向」を表す場合は「る」形、「た」形、「ている」形で表すが、動詞の語彙的意味や「ている」形の表す意味によって、(20)～(22)のように「頻度の傾向」の読みも取れる場合がある。

(17) 最初からだけど相変わらず春香さんが禿げぎみに見える。(http://ameblo.jp/nill-exe/page-5.html)

(18) 志方は自棄ぎみに手紙をテーブルに叩きつけた。(花埋み)

(19) いずれのシンナーもだいたい4～5倍に薄め、厚吹きぎみに吹いてます。

(http://kohokugareki.blog100.fc2.com/blog-entry-191.html)

(17)～(19)では「見える」と「叩きつけた」は完成的に捉え、「吹いてます」は継続的に捉え、「状態の傾向」を表す。また、

(20) 言葉もすべりぎみに話しかけている。(http://wwwz.tss-tv.co.jp/web_story/20090916_1)

(21) 食事の後に薬を飲み、のど飴を食べ気味になめていた (なめるだけだといらいらする)。

(http://www.hidetaka-kawakita.com/blog/2012/01/post-818.html)

(22) 急に会社の方針が変わり、混乱ぎみに仕事を続けた。(作例)

(20)の「話しかけている」と(21)の「なめていた」では、時間的な幅があり、動作を継続的に捉えることができ、「状態の傾向」だけでなく、「頻度の傾向」の読みも取れる。また、(22)の「続けた」は完成的に捉えられるが、「続ける」の語彙的意味によって、「頻度の傾向」も読み取れる。

以上から、文末の述語が「る」形であれ、「た」形であれ、「ている」形であれ、「状態の傾向」を表し、動詞の語彙的意味や「ている」形の表す意味によって、「頻度の傾向」も読み取ることができる場合があると言える。

5. 話し手の評価について

話し手の評価について、プラスとマイナスのどちらか、またどのような心的態度で評価するかを考察する。「状態の傾向」の場合と「頻度の傾向」の場合は話し手の評価は同じなので、以下で「状態の傾向」の場合の例を取り上げる。

まず、話し手の評価には、プラス評価(23)、マイナス評価(24)、プラスでもマイナスでもない評価(25)があるが、その多くはマイナス評価である。

(23) 午前中の撮影は飛ばし気味に行ったので、午後からのスケジュールの余裕が出てきました。

(http://kazenakuhibi.at.webry.info/201109/index.html)

(24) 「とってもおいしい！」直美はやけ気味に汁をガブ飲みした。フーッと息をついて、「これからどうするの？」(探偵)

(25) その風を、彼女は全身にうけとめた。ヒールのきれいな高いサンダルをはいた両足を開きぎみにフロアにしっかりと踏んぱり、脚をまっすぐにのばして腰をひきしめ、肩をまっすぐにして胸を張った。(寝顔)

(23)では、「午後からのスケジュールの余裕が出てきました」からプラス評価、(24)では、「やけ」からマイナス評価であると考えられる。また、(25)をみると、彼女の様子を写實的に記述し、プラスでもマイナスでもない評価であると思われる。

[表 1]

	実例数 (283 例)
--	-------------

プラス評価の場合	14 例(4.95%)
マイナス評価の場合	170 例(60.07%)
プラスでもマイナスでもない評価の場合	99 例(34.98%)

[表1] から、「ぎみに」を用いる文の多くはマイナス評価であると言える。

また、話し手がどのような心的態度で評価するかをみると、婉曲や意外な気持ちがあると考えられる。

(26) 今、蜂蜜梅酒をやや一気飲みぎみに飲んで、布団に入りました。

(<http://blog.livedoor.jp/mipokopoko/archives/50596887.html>)

(27) 歌はエンジェル隊が担当ということで、主役5人の声優さん(新谷良子・田村ゆかり・沢城みゆき・山口眞弓・かないみか)が声を合わせて、おそらくわざとでしょうが、若干下手気味に歌ってくれちゃっています。

(<http://100989001.livedoor.biz/archives/51043424.html>)

(28) 「どこへ」いちいち夫の行き先をたずねたりしたことのない麻子が、珍しくそんなことを言うので、平田は幾分うろたえぎみに、「え? ああ、ちょっとな。寄りあいがあつて」といい、麻子に背広を出させた。(白い焰)

(29) 過酷な職場で、健康すら侵され気味に働いている。(作例)

(26)の「やや」、(27)の「若干」、(28)の「幾分」は「数量・程度などが僅かなさま」を表し、話し手の事態に対する評価が婉曲的であることを表す副詞である。また、(29)の「すら」は極端なものを取り立てて話し手の意外な気持ちを表す助詞である。いずれも評価性と程度性を示すものである。このようにみると、「ぎみに」を用いる文には、話し手の事態に対する婉曲な表現³や意外な気持ちなどがあると言える。

以上から、「ぎみに」を用いる文の多くはマイナス評価であり、また話し手の意外な気持ちや婉曲な心的態度を表すことができると言える。

6. 事態の捉え方

(30) 身長170cm体重63キロなら何も問題ないはずなんですが、自分は太りぎみに見えます。

(<http://qanda.rakuten.ne.jp/qa5282195.html>)

(31) …(中略)…、その車は左折後タイヤを鳴らしぎみにいく。(http://kagidr9955.blog68.fc2.com/blog-entry-416.html)

(30)は太っている状態を指し、「状態の傾向」の読みが取れる。(31)(前掲の(15))では、「左折後タイヤを鳴らす」ことを一つのみとまりとして捉えると、「状態の傾向」の読みになるが、「左折後」には時間幅があり、「鳴らす」という動作が間欠的に起こるという意味で捉えると、「頻度の傾向」の読みになる。

283例を「状態の傾向」を表す場合と「頻度の傾向」を表す場合に分けて分析すると、次の[表2]になる。

[表2]

	実例数 (283 例)
「状態の傾向」しか表さない場合	239 例(84.45%)
「頻度の傾向」しか表さない場合	0 例(0%)
両方とも考えられる場合	44 例(15.55%)

[表2]では、「状態の傾向」のみを表す例は多く、単に「頻度の傾向」のみを表す例はない。また、「頻度の傾向」を表す例は、「状態の傾向」も同時に考えられる。ここから、「ぎみに」を用いる文は基本的に「状態の傾向」を表すと言える。

7. まとめ

³八尾(2006)でも、「語気を和らげる機能を持っている」としている。

これまで考察してきたことをまとめると、以下のようになる。

「ぎみに」は主に「状態の傾向」を表すが、動詞の語彙的意味、補語、複数の主体などによって、「頻度の傾向」を派生的に表すこともある。このことから、傾向を表す接尾語は頻度と関連していると言える。

また、「ぎみに」にはマイナス評価、婉曲性、意外とといった話し手の心的態度が含意されている。これは単に頻度のみを表す副詞とは異なっており、頻度を表すものを体系化する際には重要な要因であると考えられる。

参考文献

- 井上次夫(1998)「傾向を表す表現について——～がちだ・～ぎみだ・～やすい——」,『国文——研究と教育—— 第二十一号』, 奈良教育大学国文学会.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』, ひつじ書房.
- (2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」,『日本語文法』2巻2号.
- 国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』, 大蔵省印刷局.
- 小学館国語辞典編集部(2002)『日本国語大辞典(第二版)』, 小学館.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』, くろしお出版.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 八尾由子(2006)「傾向を表す接辞 ガチ, ギミ, ヤスイ」,『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』21, 岡山大学大学院文化科学研究科.
- 矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」, 仁田義雄・村木信次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法1 文の骨格』, 岩波書店.

使用テキスト(本文中で「作例」と注記した例はネイティブによるものであり、アドレスが書かれたものはインターネットで調べたホームページ上の文例である。)

景色=片岡義男『ふたり景色』(角川文庫)角川書店(1987), 号泣=江国香織『号泣する準備はできていた』(新潮文庫)新潮社(2003), 孤高=新田次郎『孤高の人』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995), 白い=赤川次郎『白い焔』(光文社文庫)光文社(1987), スメル=原田宗典『スマル男』(講談社文庫)講談社(1992), 探偵=大藪春彦『雇われ探偵』(角川文庫)角川書店(1982), 血=赤川次郎『血とバラ』(角川文庫)角川書店(2007), 寝顔=片岡義男『寝顔やさしく』(角川文庫)角川書店(1985), 花埋み=渡辺淳一『花埋み』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995).